

科学する心ってなあに？

～子どものやってみたい気持ちを大切に～

社会福祉法人堺暁福祉会 幼保連携型認定こども園 あかつき保育園 大阪府

ここが
Point!

改めて考える「科学する心」、若手へとつながる実践研究のバトン

0歳児から5歳児までの「科学している心」のエピソードが、各先生方の視点で温かくも詳細に紹介されています。一つひとつの事例の豊かさもあることから、「科学する心」とは何か？という根本的な問いに立ち返り、若手の先生方を中心に実践研究を進めたところにも注目できます。おかげさまで、本プログラムのスタートから20年以上の年月が流れました。その間には、教職員の入れ替わり、園を取り巻く環境の変化があったと思われます。「科学する心」にとどまらず、これまでを見直しつつ、次世代へと実践研究のバトンをつなげていく取り組みが必要です。全年齢を通してみられた子どもたちの前向きさと粘り強さ、それを保障する場と時間の大切さに改めて気づいた先生方が、今後どのような実践をつくりだしていけるか非常に楽しみです。

若手保育者を中心に 「科学する心」とはなにかを 問い直す ～エピソード記録とまとめ～

若手保育者を中心に「科学しているとは？」とそれぞれが思う“科学している心”のエピソードを各クラス、写真を持ちより、日々の保育を話し合ってきた。「科学する心」について共通認識を図る中で、子どもの“やってみたい！”という気持ちから遊びが始まっていくことを再確認する。どの事例でも、子どもが主体となり遊びが始まっており、保育者も自然と“子どもが主体となるように”を意識していることが話し合いの中でわかった。保育者が子どもと関わる上で“大切にしたこと”“工夫したこと”や“大変だと感じたこと”を振り返りまとめる。

大変だと感じたこと

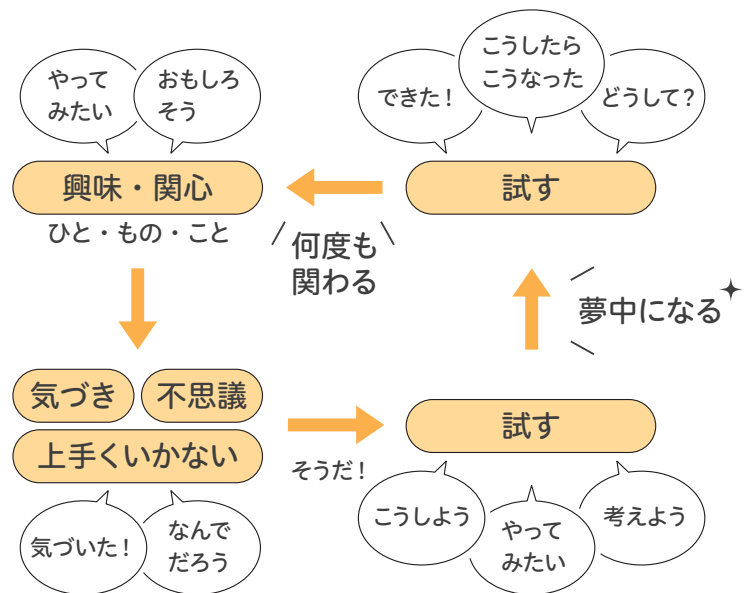
- 幼児クラスは遊びが継続していく姿を見守っていく事例が多いが、乳児クラスは「あ、科学しているな…」と思う“瞬間”を見逃さないようにしないといけない。
- 子どもの意見をどこまで取り入れるか、どこまで保育者が知らせるか悩んだ。
- 子どもが考えた時にわからないことが多ければ、遊びの意欲がなくなっていくので保育者が援助するタイミングが難しかった。
- 子どもが欲しい素材を発言したときにすぐに提供すること。

大切にしたこと・工夫したこと

- ゆったりとした環境の中で子どもが遊べるように担任間で連携をし、場を保障する。
- 子どもの遊びが続くような関わりに気をつける。
(もう少しで子どもが気づけそうなら今はそっとしておく等、必要に応じて知らせたり見守ったりする)
- 担任より虫に詳しい年長児を頼ることで子どもたちの興味・関心を引き出す。
(異年齢での関わりを大切に)
- 子どもが自分でできそうなことは見守る。
難しいところは手伝うようにする。
- 子どもの気づきに共感する。
- 子ども自身で気づけるように見守る。
- 子どもの意見を取り入れる
子どもの声に耳を傾ける。
- 子どもによって声のかけ方、方法の知らせ方、援助の仕方を変える。
- 大人がこう!と言ったらそれでいいと思ってしまうので子どもなりに今までの経験や知識を活用できるように話す機会を設ける。
- 子どもがイメージしたときにすぐに取り組めるように材料や素材を用意し、環境を整える。
- 子どもが次はこうしよう!とする姿を認める。

「科学する心」の捉え

子どもが遊びや生活などの身の回りの“ひと・もの・こと”に触れる中で興味や関心をもち、“やってみたい！”“おもしろそう！”と自らの働きかけから、見て、触れて、感じて遊ぶ中で何かに気づいたり、不思議に思ったり、うまくいかなかったりすることをきっかけに“もっと自分でやってみたい！”“考えてみよう”と遊びの中にぐっと入り込んで夢中になっていき、試すなかで“できた！”“こうしたらこうなった！”“なんで？”という新たな好奇心や疑問が積み重なっていき、繰り返し試し遊びが展開されていく。



子どもが“科学している”ってなあに？ 私たちが考える「科学する心」の捉え

箱の中に入れてみたい 0歳児

段ボール箱にセーターをかぶせた物を用意し、マジックテープ、スポンジ等の様々な素材を付けたり外したりして遊ぶ。A児が段ボール箱の上部（ふた）が開くことに気がつく、そこにスポンジを入れてみようとした。しかし、指先を使って押し込むがスポンジは入らない。A児「あれ？」と不思議そうな表情を見せる。A児の様子を見守っていた保育者が、本児の表情に気づき、少し上部（ふた）を開けると、スポンジは隙間に挟まり、A児は「お！」と嬉しそうな表情を見せ、指先で押し込むとスポンジは中に入った。A児も保育者の真似をしながらスポンジを入れてみようとする。しかし、A児は箱の側面から上部（ふた）を持ち上げるように開けたため、A児の位置からでは上手く押し込めない。背伸びをするなどして、なんとか入れようとしていたが入ることはなかった。保育者は、しばらく見守っていたが、A児が両手を使いながら上部（ふた）を開けたり押ししたりして必死な姿から、本児の“やりたい”気持ちを大切にしつつ“できた”喜びを感じてほしいと考え、反対側に回ってみるよう声をかける。A児は反対側に回り、再び片手で上部（ふた）を開けて、もう一方の手でスポンジを入れた。その場所からなら入れられることに気づき、スポンジを取っては入れやすい位置に立って、入れることを繰り返す。

始めは少しの隙間しか開かない段ボール箱だったが、遊び続けている間に大きく開くようになる。A児は開く隙間の大きさの違いに気がついたようで、近くに転がっているボールを入れ始めた。保育室のボールプールの中からボールを選んで入れることができる場所へ戻ってきた。本児がボールを選んでいることを保育者は不思議に思い、様子を見てみると、ボールプールの中からマジッ



クテープがついているボールを選んでいることに気づいた。その後もマジックテープが付いているか付いていないかを確認している姿が見られた。その姿を見ていたB児も、模倣してボールを入れて遊び始める。B児はA児が考えたり試したりする姿を見ていたので、最初から片手で上部（ふた）を押して、難なくボールを入れて遊ぶ姿がみられた。

ホースに水を入れたい 1歳児

7月、壁に設置したホースに興味を持ったC児が、ビニールプールに入っている水を近くにあったカップですくい、ホースの口に入れようとする。カップの水をホー



スの口に勢いよく傾けたため、水がこぼれてなかなかホースに入らない。カップで水を入れようと繰り返していたが“水が入らない”と感じたようで、C児は小さなペットボトル(口がせまいもの)を選び、水をすくい、ホースの口とペットボトルの口を合わせて水を入れた。水は入ったが、C児はホースを指差し「(水) ない!」と言う。水を入れるごとに、ホースの先を左手で押さえ、自分の体とペットボトルをゆっくり傾けて水を入れるようになる。何度ホースの中に水を入れてもホースが透明のため、「ない!」と言うC児。保育者が水に色をつけると、C児はホースの中にたくさん入っている水を見て「あった!」と満足そうにしていた。

どうして動かないの? 2歳児



毎日の観察を楽しみにしていたが、羽化した蝶は動かなかった。虫には命があることを2歳児なりに気づく機会になった。

やっぱり、ながれたー!! 3歳児



「まっすぐやったらあかんねん」。遊びの中で試行錯誤を繰り返し、経験の積み重ねから水の流れには傾きをつける必要があることを知った。

もっとこうしたら…!? 4歳児



「アイス屋さんがしたい」の一言をきっかけに始まったお店屋さんごっこ。主体的に遊ぶ中で遊びたい気持ちが高まり、意欲を支える環境を整えた。

思いを伝え合って協力して 5歳児



子どもの気づき、意欲、試行錯誤を繰り返すうちに探究心が深まり、疑問から予測、確信とつながった。友達がいいたからこそ経験が豊かになることを感じた。

「科学する心」を感じた 5歳児



5歳児

やっぱりここなら凍るんや!

寒くなってきて氷ができるのでは?と何度も試す中で、水の量を少なくしたりこの場所なら凍るだろうと子どもたちなりに気づいたり予測していました。子どもってすごいなと思いました。

実践の背景や全体像、園の先生による事例分析や考察は論文をお読みください。

